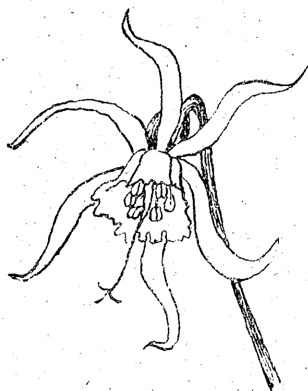
○イトザキズイセン（糸咲水仙）に就て（津山　尙）

明治 41 年 1 月 5 日發行の科學世界 1 卷 4 號に牧野先生は「稀有植物ノーナルいとざきずいせん」の題で，圖版 1 枚を伴つた新植物を紹介され，更に同年 11 月發行の植物學雜誌歐文欄 161 頁にてスイセン(水仙)の 1 變種として *Narcissus Tazetta* L. var. *pancratiformis* Makino の新學名と英文の記相文を發表された。それによるとこの植物は竹島の產と傳えられ，「其の葉の樣子は普通の水仙と異つていないが，其の花に到つては著しく特狀を示して居る。即ち其の名の示す如く其花蓋片即ち其蕚片と花瓣とは頗る狹長にして殆んど絲狀を呈せる線形をなして居り其色は白である又花冕(Corona —— 註，副冠）は杯狀を呈して又漏斗狀の趣きがある色は黃である」又「……水仙の異狀なる一變種であつて……特に園藝上では最も喝采を博すべき一品たることを失はないと思ふ。そして今世間に之を見受けることがないのを見れば餘程乏しき品と言はねばならぬ。……」(原文片假名）ものである。英文の方では「花は徑 5 cm で花托の筒部を缺除し，雌蕊は副冠內に含まれるが，雌蕊は長く超出し，柱頭は 3 裂している」ことが判る。小生もこれを見たことはないが，柱頭がこの樣に長く突き出し，その先端が深く 3 裂している點は他のスイセン屬に全く見られない特徵であつて，花托の筒部がないことは蜜の分泌がないことを意味し，受粉上の障害が大であることが想像されるし又實際に果實を實ばない由である。このことはこの植物が緣の遠い 2 種のスイセン屬の間の交配種であることを思はせる。葉の狀態は牧野先生も指摘される樣にスイセン（房咲水仙）と異つていないし，花梗の長いこと，1 總梗に 2—4 花を開くことは，少くとも片親はスイセンであることを示している樣である。しかし花徑は 5 cm もあり，副冠も稍大である點は他の片親がより以上に大形の花を有し，副冠も大であることを要する樣に思ふ。スイセン屬は園藝上種々の種間雜種が作出されているが，この樣な形態のものを嘗つて聞かないのは，兩親の組合せが餘程突飛なものであつて普通は發芽可能な F_1 を生じないのであるが稀な機會にこの植物が出來したものではあるまいかと想像される。そう言う可能性のある片親として *N. cyclamineus* Baker 等が考えられないでもない。このものの花瓣は細く，花托の筒部は短く，副冠は長く，雌蕊も長く，花徑はスイセンより大である。



科學世界の圖版の一部の模寫

○タカネタウウチサウ（原　寛）

永らく使ひ慣れた *Sanguisorba sitchensis* C. A. Meyer (1856) の學名は，Fernald